

大板山たたら製鉄遺跡

萩本土の北東の森の中に大板山たたら製鉄所跡がある。現在では人里離れた場所にあるが、2世紀半前は、長州藩の工業化の夢を実現させたのはこの火焰炉であった。。

萩の指導者たちは、沿岸の防御を強化する必要があることを理解していた。中国は第一次アヘン戦争（1839-42年）で英国に敗れ、米国のマシュー・ペリー提督（1794-1858年）は1854年に日本に外交条約の調印を迫り、太平洋にはますます多くの西洋の船が来ていた。日本の軍隊の近代化の必要性は全国的に広く受け入れられるようになったが、大砲や弾丸、その他の資材は鉄を必要としていた。

伝統的に、日本では鉄はたたらと呼ばれる独特のタイプの高炉で生産されていた。たたらは、鉄砂と炭を溶かして高炭素鋼のブルームにするために使われていた。鉄砂は、現在の島根県の石見国から名護港を経由して積み込まれた。そこから鉄の道を9キロ、大板山の製鉄所まで運ばれた。完成した鉄は馬で名護に戻り、船で萩、そしてその先へと運ばれた。

たたらのはたたらは、番子と呼ばれる男たちによって動いていた。番子は3人1組で24時間、1時間働いて2時間休み、製錬が終わるまで約70時間連続で働いていた。たたら製鉄で作られた鉄は硬く、刀剣を作るのに最適であったが、鉄を使って鑄造された大砲は爆発する傾向があった。1850年代に日本が開国すると、長州藩は新しい技術を求め、1870年、1世紀以上の生産期間を経て、大板山たたら製鉄所の炎は永遠に消えた。

1991年から1994年にかけて大板山たたら製鉄所の考古学的発掘調査が行われ、中央の高殿部分には炉や天秤鞆、鉄砂の散布施設、排水路、焼入れ・焼入れ池などがあったことが明らかになった。

2015年には、大北山たたら製鉄所がユネスコ世界遺産「日本の明治産業革命遺産 鉄鋼・造船・石炭産業」に認定された。